七條河原 釜淵双級巴

作者 並木宗輔

地唐土にフシやさしき名をば。付きたるは。綠の林白波とオクリ和言。唐音變れども變らぬ國のあれ鼠。石川の五右衛門とてもとは岩木の惣領なれども。河内の土民に育てられ農作きらひ大小を。好む鎺のフシつまりより。好まぬ事に旅姿オクリ笠で。日の目をふせげども防ぎかねたる口の端に。フシ所離れて何國へかオクリ生駒の。山の山つゞき。鬼取よりも恐ろしき。摑む心のフシ鷲の峯。地麓は小川いがみ川。地曲り〳〵て身の上をそれと沙汰せじ佐太の森フシ牧方近く着きにける。地色五右衛門暫く立休らひ。詞ハア、美豆野御牧に。鹿狩があるかして多くの勢子の聲。羨しやなあ。地我も武門の家に生れながら。如何なる事にや三つの時より捨てられ。百姓の家にて人となり。鋤鍬よりも大小と心は一騎當千でも。詞人の物を我が物にすれば所を追出す。地都で別れし妻や子に逢はうと思ひ是迄は出ごとは出たが。詞先づ北國へ行て働かうか。東國方がよからうかと。地取つつ置いつの心は那智黑。磨きかねたる性根なり。地色かゝる所へ何國とも逸矢一筋飛び來り。小松の枝にはつしと立つ。はつと五右衛門打驚き。此藪垣のあなたに鹿狩。さては逸矢か長居はならずと。行過ぎしが立留り。何か暫く思案して立歸りて彼の矢をば。引抜き取つて足早に。フシ來た道後へ駈け戻る。地色狩場の方より髭奴息を切つて馳せ來り。逸矢尋ぬるうろ〳〵眼。其處よ此處よと草叢を搜し廻るフシ跡よりも。地色友傍輩が息やすめ。煙管くはへて。コレサ是非內。詞何をきよろ〳〵しめぐる。お仕着せの襠はもはや蹴込んだか。コレサ〳〵。はてこな者何落して何尋ねる。イヤ何も落しはせぬ。若殿のお矢が知れぬ。汝も共共尋ねてくれ。それが尋ねに及ぶ事か。若殿のおやは都三位中將樣。手前のお屋敷へ御養子にお出でなされ。今の親なら我々が旦那。ハレ狼狽者め何馬鹿つくす。見えぬは鏑のお矢さ。かぶらの親なら大根の事かと。地どんな間人と口下手がフシ爭ふ所へ。ハルフシ國の世繼の。若綠。地まだ十六の角丸〳〵跡に付添ふ諸侍。御傳役の當馬を始め。御休息の其間風景御寶と床几を直しフシ傳き申せば。地若殿は逸矢の見えぬに御心を痛め給ひ。詞いかに方々。昔義經八島にて。弓を浪間に取

落し。小兵を敵に知らせじと海へ飛入り取返し。恥辱をかくし給ふとや。地我も其矢は惜しからねど。里の農人拾ひなば腕固らずと笑はれん。面目なやと年よりも恥を知つたる御一言フシいづれも。感じゐる所へ。地石川五右衛門老母と見えし手負をいたはり。物哀れに打萎れ。ちとお願ひと間近く寄り。手をつかへ頭を下げ。詞某めは隣國和州浪人。身貧に迫り一人の母を伴ひ。都方へ助力を頼みに參る此道。何者の業にや。遠矢を射かけ。母が肩先を射抜く。早速抜き取り保養致し候へども。地次第に弱る老の急所。せめて息ある中に敵を取つて見せ申したく。心は彌猛にはやれどもいかなる者のわざとも知れず。詞御弱年なれども。此國の大守と見受け御訴訟申す。あはれ御威光を以て御詮索乞ひ願ひ奉る。地則ち證據は此一矢と。差出す矢こそ最前の。射損じ給ひし白羽ぞと近習外様も打驚き。若君はつと思せども。さすが一國一城を治むる器量備づて。其矢是へとお手に取り。詞敵を顯し母の怨を報ぜんとは。ヲ、天晴の志。最前逃げ行く鹿を射損じて。過せしは某よ。地イザ立寄つて遺恨をはらせ。相手になりて取らせんと。さも潔く宣ふにぞ。人々手に汗握るばかり。フシ事こそあらんと身構す。地色五右衛門御顔つくく〳〵詠め。詞栴檀は二葉と申すが。ハアア御威勢といひ御器量備はる御一言。見る影もなき素浪人が詞を立て。地色相手に成つて下されんとは分も立ち心もはれ。お恨申さんやうもなし。詞コレ母人。今のをお聞きなされたか。敵といふは此國の城守。我々しきが相手とは勿體なく恐れあり地言ひがひなき悴ち。貧苦に迫る其上に。あへない最期とさぞや無念に思されん。詞せめてこなたの心晴しに。冥途黄泉のお供を致し。死出三途を負ひ奉らんそれで腹をゐてたべと。地座を占め覺悟と見えければ。若君驚きアレ留めよと宣ふに任せ。御傅役の當馬之丞つかつかと立寄り。詞ヤレ逸り給ふな御浪人。御心底尤もなれども。見れば僅かな浅疵。保養を加へ給ひなば。よも命に別儀あるまじ。生死も知れぬに追腹とは近頃麁忽と。地言はれて暫く差扣へ。面目なや其保養致す方便があれば。相果てうとは申さぬ。詞今日を立てかね。母を他門へ預けに參る程の儀。何とて介抱フシなるべきや。地色さあればとて現在親の今はの手疵。他所に見なしてゐられうか。心底の程御推量と涙にふるふフシ聲音に泥み。地色御用金一包挾箱より取出し。詞近頃侮りがましいが。貧苦に迫るお物語お笑止に存じ。母御の手疵養生代。地些少ながらと差出す。詞ヤレ情なき御差配。身不肖

なれども以前は懸鞍にも腰を掛け。錆鎧もつかした某。金銀を貪れば斯様に身貧は仕らぬ。お眼識が違ひました。地近頃仁體に似合ずと。立派な詞に猶押返し。詞そりや一概の御了簡。一國の掟にも。過料を以て誤をゆるす。是則ち若殿の。誤をふせぐ過料金。申さば僅か五十兩なれども。若殿は堂上方より此國へ御養子。某親の名代としてつき來り。まさかの時の御用にもと貯へ持ちしお枕金。則ち金役の名判かけ屋の極印。地さもしき金も出所は一天の君の御座所。堂上方より出でたる金。御拜領も同然。詞一つは若殿のお心も休めるため。御受納あつて給はれと。地事を納むる詞を幸ひおつ取つて押戴き。詞拜領とあれば身の面目。有難しと受納致そか。ハテそこに御遠慮無用。但し些少なかな。コハ勿體ない。左様なれば大悦。地色只此上は老母の介抱專要と。立別るれば若君もコリヤ〳〵浪人。詞我が誤を償ひしは事穏便の爲なるぞ。汝が力と思ふなと。地仰かしこき道草や。ッシ露踏み分けて出で給へば。地色當馬之丞も心得ぬ浪人者と見ながらも。殿の御名を大垣の。内に籠めたるいかゞ嶋オクリ目かどをへ付けてッシ立歸る。ッシ後見送りて。地色五右衛門は金懐に取納め。あたりを見廻し手負の傍。立寄つてコリヤ婆。詞首尾はよいぞ早起きろと。地言ふよりむつくと蛋取眼。目を光らして。詞お侍様味ようしやました。どれ分口。地下はりませと手を出せば。ヲヽ大儀代取らせんと。鳥目貳百投げ出し。必ず外へ沙汰すなと言ひ捨て行くを引きとゞめ。詞コリヤ何でえすぞ。五十兩の割前を。どてまたとはヲけうこつ。お目出たいを圍うても是程は暖る。心よう寢てゐるを矢の根で肩先突き破り。目の眩ふ所を金々と。地金で性根をつけさせ。俺がするやうにせいなれと。成つてゐたので五十兩。茄子わけでも有りやうは。痛い目しただけお負でえんす。詞これなしの目くさり錢地いらぬでごんすとッシ蹴返せば五右衛門むつとし。詞ヤイ乞食婆め。菰を脱して下著を着せ。酒くらはして血走せ。腹ぼてさしたが大きな賃。まだ其上に五十兩の扱ひ金半分取ろとは。テモ横着な老耄め。イヤ人に疵付け其賃を。一人して飲まうとはテモ恐しいお侍。我が。こなたが。おのれがと。地詞あらして割り打ちを。やらじ取らんとッシいどみあふ。地色婆は初手より物だくみ。一味を拵へ置きたるか。小屋の者共皆來いと。呼る聲に五右衛門も南無三寶と飛びかゝり。取つて引寄せ心もと。ぐつと突込みッシ一えぐり。ヤレ人殺しと最期の大聲。餘さじ遣らじと乞食仲間。てん手に棒杖釘打竹。騙り

ひろいだ侍を。叩き萎せぶち殺せと。喚いてかゝれば八方微塵論に及ばず切りなぐる。一方獏げば一方から。群りかゝるを立割。梨割唐竹の。斜に殺がれて逃ぐるもあり。村の番太も役人も。加勢をすれど叶はゞこそ。秋の木の葉。と散り失せて。残るは石川鐵石フシ五右衛門地騙り取つた五十兩。小判の耳より人の口。萬萬兩とも言ひ囃す。千が萬とり百が千とり。五十歩逃げて百歩をば。飛ぶも一飛び一息に船場をキホと指。してぞ三夏いそぎ行く。二上り歌里は名高き。ギン都の富士と筋向ひ。色をたてぬき嶋原三筋。よみのこんだるナホスフシ遊女町。地爰に流るゝ瀧川が今日浮草の根引とて。常より早き揚屋入。おくる遣手の鼻さへもフシ燕尾屋にぞ入りにける。地色主の傳六忙しげに。詞エイ瀧川様が待ちかねます。夜前人を上げます通り身請の埒をなされんとて。平様はお國より昨日大坂迄お着き。お藏屋敷の御用をしまひ。すぐに夜舟で上らんとのお飛脚。それ故お前の親御の方へも。今朝早々から人走らせ。是もやんがてお客も追付。すりや肝腎のお前の方へ。使業では心元なく。ちきにお馬と出かける所。お顔を見たで。先づ落着く。サアサア奥へイザ奥へと。たくしかくればヲ忙し。詞今朝から早うとお使なれど。昨夕聞いて今日の事。地色親方への附届傍輩衆との暇乞。何かに際入り遅なはつたら免してと。ねぢられてイエ〜〜〜。詞遅い事はござりませぬ。呼びましておけとの御狀所をひよつと間違うては私が無念と。お目玉を貰ふがいやさ。堅苦しい田舍侍。地町の粋とは違ひますと。言へば遣手がヲそれ〜〜。詞廻りがようても揚錢の外。一文散らさぬ吝ん坊。後の登に前垂の染賃いうて見たれども。いつかな事すつとこなでお歸り。地あんな吝い侍は。嶋原へ出かけずとも。臍腹切つて死んだがよいと。謗れば亭主がコリヤお杉。詞あの氣でも見ん事身請今日まんさら無手でもあるまい。なんぼ吝くとびん水入の。そこらは鼻が口車。地廻しかけるぞあてにしや。ヲツトそんなら川さまと圍の間で飲みかけう。執成いうてくれなされ必ずや傳六さん。忘れまいぞと念押して。奥へ入ればヲ、いかにも。萬は我等呑み献立。しまうて取らんと傳六は臺所のフシ板本に。ヤアえいとこ鯖冷し物。何から正銘房信の。薄刃追取りちよき〜〜〜ちよつきりきり〜〜切り刻み。フシ人の氣をとる料理かた。地色酸いも甘いわくた者が知つて付込む瀧川が。親の惡者三二五郎兵衛。娘の身請をあてにして伴ひ來る負せ方。置土の九郎次とて低みを埋めて歩をわせる。日廻し金の忙しなうコリヤ

五郎兵衛。詞金を濟す當があると。嶋原三界此様に。引きずり廻つてどうするのぢや。見ん事われ濟すかよ。ハテ濟さいでよいものか。豫て咄した娘が身請。今日埒する筈。廿兩や卅兩は祝儀というても取り易い。地利足揃へて急度返辨。氣遣ひのきんの字に。長點かけて貰ひましよと。慥な詞に九郎次もにつこり。詞ヲヲさうなうては叶はぬ筈。胴金の根城損かけうとは思はぬ。地間違ひのないやうと。念に念おす詞を返し。詞ハテ高の知れた貳拾兩。穴一倍はつても濟めかねぬ。どんどと仰しやる事はない。地不承ながらちつとの間。爰に待つてと燕尾屋の。中戸口に九郎次を待せ。つつと通つて詞エ傳六様それにござりますか。今朝程はお使。姉めが身の上段々お世話。首尾なりまして私も。金の緒に取付きます。サレバ〳〵。娘御が出世の月付。其許にもよい入前。地瀧川様も今來てなり。お客も追付見えませう。見ればお連もありさうな小座敷が明いてある。酒でも參つて待たしやませ。詞申し表の。此方へ入つてお休みなされ。地然らば御免と フシ内に入る。地五郎兵衛も落着顔。詞娘に逢うて待合せお客にもお目にかゝり。ちよつと咄す用事もあり。地其事に付きこの連衆。臺所にゐりや結句お邪魔。片脇の小座敷をそんならいつそ御無心と。九郎次を伴ひ煙草盆。フシ提げて一間に入りにけり。地色はたゞハルフシ心の外や。瀧川に戀ぞ積りてふちかたを。金に束ねて身請する。平の平平常ならぬ連に危き石川五右衛門。フシ跡に引添ひ入來る。地亭主は矢庭に飛んで下り。そりや平様の御登り。御出の御筋。先づ川さまへ知らして呼出せ。ヤレ目出たい〳〵と。鳴りまはれば瀧川もフシ遣手引連れ立出づる。詞これ〳〵御亭主。イヤサあまり其様に仰山さりとは迷惑。馳走になりには參らぬ。瀧川殿を請出すばかりの上京。扨此お連は牧方より同船の御浪人。夜がな宵とお咄相手。殊に船中の間船上りより是までイヤハヤ仰山御懇意。お心遣ひの返禮旁々。ひらにとお供して罷越した。地御酒一つ上げておくりやれと。挨拶すれば五右衛門も。態々詞をやはらめて。詞こりや御亭主初對面でござるよ。拙者は此近傍にそとい。たした浪人者。見らるゝ通り長髪。養生の爲大坂へ罷越し。夜前歸る乘合にて四方山の咄がしみ。連があれば三里とやら。お誘ひに任せ立寄り申した。承る様子がお傾城を請出さるゝ由。何とやら羨しい。歴々の御身上に肖り。地珍しい廓酒。病中の憂さばらし一つ食べて歸ろかい。詞コレハ〳〵有難いお詞。ガ此廓始つての燕尾屋。初對面とはちとお恨。御長髪で

はゞされども。お達者さうなお産付。盜人に見せても御病人とは申すまい。地先づ平様と奥座敷へ御同道。それお盃御膳の用意と。騒げば平平ア、是さ〳〵。詞其心遣ひ仰山困り申す。かう參る道。かの藤の森にて一膳蕎麥。あなたも拙者も仕度は仰山よくおぢやる。夜食がほしくば乞ひ申さう。例の豆腐のぐつ煮に冷飯。イヤモそれが仰山御馳走。御浪人も病中とあれば食養生が肝腎。最前も言つた通り。料理食べにはるゝとは參らぬ。今日は君が身請の一卷。外の事は費へ費へ。先づ契約の金渡すべい。地小判といふ物見せうかと。猫に鰹の五右衛門が。鼻のさきにて二百兩取出して封押切り。詞先達て渡した手附が四十兩。今百十兩都合百五十兩。是で身の代買懸りの借金ぐるめ。地何かの作畧皆濟とよみならべ。殘りの金に又封しつかり肌に付け。詞何さこれ川殿や。拙者は御寶ある通り。大切の金仰山しての心中。其許にも金の冥利。我等を隨分大切に。可愛がつてくれめせと。地いふも笑止さ瀧川は。ッシいとど轉さ。增りけり。地色傳六は金受取り。詞いかにも是にてさらりと落着。お金をわたしは親方へ。すぐに持參し證文取つてお渡し申さん。地こゝは端近お座敷へお連樣にも御退屈。コリヤ女子ども。お銚子〳〵其てうしに。乘つて身請の埒せんとハズミッシ勇み進みて出でて行く。地平平も機嫌よく何さま奥にてゆつくりと。打寛いで御酒飲べん。御浪人いさとされ。皆款待せと先に立て。跡に殘りて仲居を招き。詞お身にちと頼み事あり餘の儀でもない。是の亭主が仰山馳走ぶるが肝にこたへる。看には梅干生姜味噌がよいぞや。そなたが氣轉でついさつとと。地いふに頷く惡じやれ女子。詞アイ〳〵〳〵それ座頭と仰しやる。次手に舞子といひ捨てゝ。地呼びに走ればア、是々と。留めるかひなき當惑の。ッシ折へ出かける三二五郎兵衛。揉手して小腰をかゞめ。詞私めは瀧川が親。三二五郎兵衛と申す者。此度娘が身請をなされ。國へ連れてござる由。末頼みにいたす一人のかゝり子。一緒に引越し同道せんと存ずれども。急な事故跡より發足。それに就き方々の算用差引き委細は追つて。先づ當分入用の金三十兩。地御合力下されよとッシつまんだやうにいひ出せば。地色平平ぎよつとし。詞何ぢや小判三十兩。アノ只くれいか。瀧川こそ請出しに來れ。お身がやうな白髮親仁。請出しには參らぬ。それに何ぢや親だ。親が定なら樽肴で。歷きと禮もいふべき筈さ。無心いふ親いやだぞ。牛やら馬やらこちや知らない。アラ勿體ない。いやだぞ。〳〵〳〵と。地七里結界跳ね

飛ばされて。こなたも睚みの性根をあらはし。詞コレお侍。嫌がられても瀧川が親。娘を請出し女房にさはれば親の高家。國へいて大きな顔してかゝらにやならぬ。ア養うて貰はにやならぬ。イヤぞんざいなる棒手振め。あはれ國へ來て見らう。地ヲ、行て見せうと爭ふ所へ。勇みにいさんで主の傳六門口よりかさ高に。詞サア〳〵埒が明いて來た。コレ〳〵平さま。是が則ち川様の年季證文。右の外に一錢の掛り合毛頭無いと申す一札。出口への斷りも濟んだれば。地御勝手次第何時でも。手を引合うて大門をお出なされとッシ手形を渡せば。地平平受取りコリヤ見たか。詞外に一錢も掛り合ひ無いと潔白の證文。是でも三十兩よこせか。イヤ養へか。一粒一錢銀半文も罷りならぬ。言分あらば親方へ行て言へ。國へ來せたら枝骨切つて切折るぞと。地切刃廻せば亭主は呆れ。詞マア〳〵お待ちなされ。思ひの外な御機嫌。エ、こりや親仁殿が。初對面から御無心をいはれたと見えた。早いぞや。歌〳〵コレ親仁。詞通路も便りも並んでなし。跡からも言はるゝ事。旦那の御腹立御道理な御筋。御馬は我等がつないだ〳〵。地機嫌なほしは奥の間で。歌三下り騒ごぞや合。〳〵コレハイノお腹立てられすと酒事にして。人の羨やむ。しなだれ姿で痴話。事ならば。こちや。〳〵〳〵見ぬ顔えワイ〳〵オクリ押立てへ奥に入りにけり。地色跡に五郎兵衛胸算用九三がさんでぐわらりと違ひ。ッシ五ざん上つてゐる所へ。地色見一むはうにせがむ九郎次。のつさ〳〵とのさばり出で。詞サア約束の金いたそ。受取ろ渡せとッシせがみ寄る。地色又間違の詫言を。言ひだせばコリヤ言ふな。詞あてとは今の侍か。あの筋では明かぬぞよ。地べん〳〵だらりとつられてか。弱みを食ては九郎次が立たぬ。詞てんがら仲間へ見せしめ。金が濟まぬと眞裸體。茲被らすがせめての腹癒せ。きさつたわんぼ抜け親仁と。地素首取りて引寄すれば。借手も惡者持つたる腕挑ぎ放し。詞何とすりやこりや剝ぐのか。汝腕先で金取るか。五郎兵衛も男。地取られうなら取つて見よと。睚みかゝれば堪へぬ一腰。すらりと抜いて刀背打と。振上げかゝるを引外し。又打つ腕先しつかと執り。させぬ〳〵とッシ互の力み。地色柄一本に腕四本。捩合ひ揉合ひ張合ふに。三二は脇差挽取る拍子。九郎次が眉間へ切先の。ちよいと觸ればつと血煙。詞サア泥棒めもう聞かれぬ。金も濟まさず切つたぞよ。代官所へ斷つて汝をどうする覺えてゐよと。地喚りながらに駈出すを。それ斷らしてよいものかと。飛びかゝつて後袈裟。切られてのつけに反返るを。

聲立てさせじと疊みかけ。切りさいなまれ血みどろちんがい。のたくり廻つて。フシ息絶えたり。地色瀧川は座敷の隙何心なく來かゝりて。かくと見るより走り寄り。詞ヤア父様こりや何事。討果して死ぬる氣か。地ナウ悲しやと取付いて。スエ歎くを聞いて詞ヤイ〳〵娘聲立てな。討果すのでなんのあろ。高は先刻に咄した金。遲なはるが曲事と。是を拔いて刀背打に。かゝるを挽取る怪我のはずみ。俺や切りはせぬ己がでに。切れをつたに紛ひはない。地後日の言譯汝してくれ小さい時から養うて。賣つて置いたもまさかの役。こんな所が親孝行。怪我ぢや〳〵と色顏變じ。フシ命を惜むうろ〳〵眼。地色娘は悟つてコレ父様。詞其言譯も證據もいらぬ。パテ見た者は私ばかり。このまゝ捨てゝお歸りあれ。地人が知つては詮がない早う〳〵と迫立てられ。顏色なほりてヲさうぢや。詞汝さへいはねば知人はない。事濟む迄は影をかくし。追付國へ行て逢はう。地其時必ず孝行に養はれねばならぬぞよ。侍にとつくりと呑込ましておけ合點かと。まだ身の慾をいひ捨てにオクリ跡をもへ見ずして逃げて行く。ハルフシ影見送りて。瀧川が硯引寄せ獨言。詞見す〳〵人を殺めながら生延びんとは愚痴未練。無理と思へどさながらに娘の口から恥しめて殺しもならず。フシ落せしが。地詮議かからば忽ちに憂目にや逢ひ給はん。ギンとても我身は請出されあんな男に一生を。繫がれぬよより親のため。我が手に掛けしと書置し自害するより外なしと。思ひ極めて涙ながら硯の海に筆濕す。心細さと悲しさと。詮方なさを取交ぜて。身を悔みたるギン忍び泣き道理。フシせめて哀れなり。地色岡目に見かねる石川五右衞門。横合より瀧川殿。そりや書置して死ぬるのかと。地聲かけずつと立出づれば。ハツト思へどせかぬ顏サア私も今日より武士の妻。不義いひかけし相手を殺し。我が身の自害は夫へ言譯。地見のがし死なせて給はれと捨てたる拔身取る手を押へ。詞ヲ、其通りの書置と思うた故にとめるのぢや。俺や最前からあれにゐて。こなたの親仁が手にかけて。駈落したのも知つてゐる。ヱ。イヤサ驚く事はない。親に孝行なこなたを。死なすが惜しさに助けに出た。身請の客に眞實を立てる氣でもなささうな。すりや死ないでも濟みさうなもの。其仕樣は平平に俺が逢うて死骸を見せ。ころりと騙す思案がある。地俺に任してつい爰へ呼出して遣さつしやれ。氣遣ひなしに濟してやろ。詞ナニあの平平をお前に逢はせば。さらりと事が濟むかへ。サアそこには深い仕樣があるてや。地ムゝン世には賴もしいお方もある

もの。もとこの原因もあの客があた吝いから出來た事。騙してなりと賺してなりと。ならば緣も切つてほしい。呼出して濟む事ならおつとまかせとかい立つて。女心に何の氣も。なくと笑ふとふりかはりッシ勇んで奥へ走り行く。地色五右衛門は手を叉へ立ちはだかつてゐる所へ。平平は千鳥足。ちろ〳〵めかどは强き醉どれ。詞コリヤ御浪人樣め。手のわるい。盃を差捨てに座敷を外いて何御思案。拙者を爰へ引擦り出いてなんでえす。三二とやらさり荷とやらが。御挨拶なら嫌でえすと。地ひよろつく足元死骸に躓き。こりや何ちやと吃驚するを拔打ちに。胸板かけて切付くれば。コハ狼藉とすらりと拔く。右の腕を肩口より打落されてうんとばかり。倒れ伏すをづだ〳〵に斬ればそこらに流るゝ血汐。瀧川駈出でヤア是はと。いふ聲も出すわな〳〵と。フシ顫ひ戰くばかりなり。地五右衛門顧めてコレコレ。詞かうしてしまへば誰が見ても喧嘩。相手向ひの討果し。外へ難儀は少しもかゝらぬ。地合點かと呑込ませば。いかさまさうと胸落着き。ハツア有難や。忝や。命の親と手を合せ。後々迄も此事を沙汰遊ばして下さるなとェェ賴む詞に。詞合點がいたか。こなたも俺も見ず知らず。いはゞ他人のふりがかり。よその事でも切人は某。互に大事はいはぬづくとばかりでは氣も休るまい。爰が談合なんと氣遣ひのない樣にいつそ二人が女夫になろちやあるまいか。すりや女房の親の科。夫が言はう筈がない。地氣が休つてよかろがのと。理詰は耳より傍に寄り。詞どうやら談合のなりさうな事。したがお前にお内儀さんはないかへと。地念を押されてイヤ〳〵〳〵。詞女房子もあつたれども。ちとした事で七年以前生別れ。今は鰥の一人住。地そんなら持つて下さんすか。ハテ持たいではと戯れて忙しき中にもひつたりべつたり。抱き締めたる緣結び。フシ深き妹背と成りにけり。地五右衛門やがて平平が。死骸の肌へ手を差入れコレ。詞是がそなたの年季證文地金は俺がと小判を引出し。押戴いたる目つき顏付。不審はれねば是申し。詞此手形は聞えたが。其金お前は取る氣かえ。取るとも〳〵。此金故に付きまとひ二百兩を取る首尾なく。九十兩ではあはぬ仕事。ヤアすりやお前は。コリヤ男の惡事を女房の口から。言ふな默れと肌につけ。ヤレ喧嘩よといふ聲に。家内が騷げば近所となり。どさくさまぎれ夕まぐれ。ぐれの來ぬうちサア來いと。走り女夫が手を引いて出口へ。こそは三重へ駈けりゆく

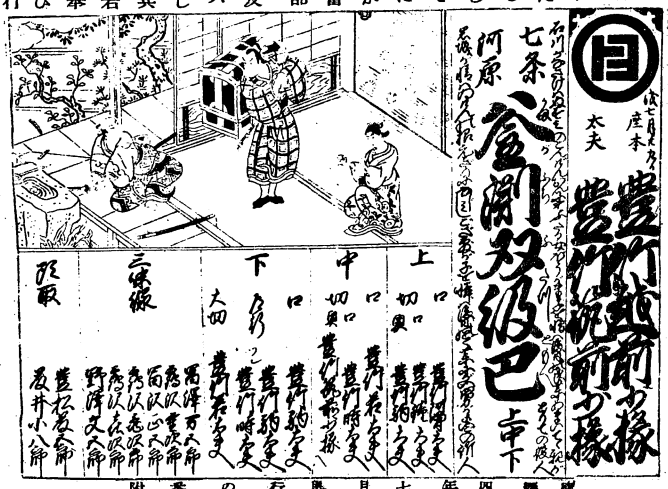
中之巻

地武士は人日に高楊枝柳の馬場に浪人の。表美々しく内證は。女房と見えて下女ぶんの。連れ子をすぐに丁稚ぶん去年生んだる子のあひが青田に變る夫婦仲。フシ世に睦じく暮しける。地色主は近所夜咄しに出行く月も四つ過。妻のおりつは乳のみ子の宵寢の膝を休めんと。表間近く立出で。詞コリヤ五郎市よ。坊が枕を持つて來い。腕が抜けるヲしんど。地ころりさそうと下におく。兄は十一年だけに申し母様。詞旦那様もお留守。表は締めてござるかや。ヲ宵から錠をおろして置いた。昨夕もお客で夜通し。地今夜轉けたら他愛はあるまい。何時お歸りあらうも知れぬ。それ迄おれは爰に假寢。詞そなたは奥にお寢間もして。煙草盆に火もいけ。裾に物置き轉けてゐや。地ろくに寢る時起そぞと。いひつけやつて乳のみ子の寐んねの伽のとろ〳〵も。二夜越しの草臥に。オクリ思はず〻深くフシ寐入りける。地色時は亥も過ぎ子にうつり牛より黑き夜盗の一族。石川五右衛門三上の百助。足柄金藏。片田の小雀。小鮒の源五郎引手して。此家をめがけ門の戸を。しやくれど堅めし錠鎖。五右衛門剛してさなせそ〳〵。詞強きを破るは變のもと。戸尻の壁を切破り。自由をさせんと兩刃の刄。地ぐつと突込み引廻せば。練磨を得たる手の内の。ぎしつく音もあらばこそ。コハリ三尺四方に切破り。内を覗ふ竹瓢簞。がらつかすれどフシ寐入りばな。地色とつくと見すまし小聲になり。詞首尾は上々さ。りながら。心にくきは見かけと違ひ。見込のなき内の樣態。殊に女が枕元。守り刀を置いたるは。浪人者と覺ゆるぞ。フシ油斷して先とられな。地小鮒の源五郎先にたて手に合ふ物を持出せ。あながち重きを徳とすな。輕きといへども錠前の。ギンおりたる物にはこうみあり。寅の刻より一陽崩す陽は顯はれ陰は隱る。今は丑三つ時分はよし。時刻うつすな急げ〳〵。詞それ〳〵疊の緣を踏み。上敷につまづくな地ハヤミ驚の。足どりそれよ〳〵と透し詠めて下知をなし。我は女が枕元目を。さまさば一討と。鎖元くつろげ待ちかけしは危くも又恐ろしゝ。ハルフシ教に從ひ。徒黨の面々。江戸着替の半櫃挾箱。金引出よと私語いて持出づれば。ヲ、出來いた〳〵。跡は。某見廻つて引包めて立歸らん。お身達先へと追歸し。一人殘つて奥の間へオクリ不敵にへも又忍び行く。ギン正直はハルフシ子供にたとへ。目にたとへ。地寢足ればいつと時知らず。目をさましたる稚子は。水フシ添乳の肌を這ひ出でて。機嫌遊びのフシ折からに。地色五右衛門葛籠背

に負ひ。出づる姿が氣に入りしか。手招き足ずりにこ〳〵と。フシわらふ笑顏の愛らしさ。地色人を剝ぎ取る邪慳にも。ハテしをらしやいたいけやと。思はずも立留り。我七年以前都追放にあひし節。離別せし女房に預け置いたる稚子の。面さしにさも似たりと。子を持ちし身はよその子の。愛に引かれて愛しかゝり。ラドリ拍子何がお氣參つて。てうち〳〵しやる。ヲヽヲヽようしやる。笑ひ佛に笑はしましよと。地我を忘れて餘念なく。背負ひし葛籠振廻し。ラドリ拍子つゞら負うたが可笑しいか。こはい伯父が嬉しいかと。地踊る疊の足音で。添乳の母は飛んで起き。詞ヤ汝や何者ぢや。何處から來た。地盗人さうなと我子を一間へ押遣つて。守り刀を搔込めば。不敵の五右衞門胴をする。詞俺や何處からも來ぬ。外から來た盗人ぢや。聲立つると捻ぢ殺す。ヲヽ殺さるゝとて主の留守。白紙一枚盗られても言譯たゝぬ。背負うたつゞら置いて行け。イヤならぬ。地ならぬと是ぢやと突つかくる。利腕苦もなく引掴み。詞おかさま。盗人にはひり。子を愛してゐるど性骨。こなたの手には合ひ難いと。地刀物挽取り顏見合せ。詞ヤ汝や女房のおりつでないかと。地頭巾を取れば以前の夫。詞五右衞門殿か。ホイ。地はつとばかりに胸迫りフシ心も空に詞なし。地色五右衞門も面目なさ。うち〳〵そろ〳〵片傍へ。背負ひし葛籠おろす内。主の浪人夜咄より歸る表の間の壁切つたは如何にと差覗き。樣子ありげな内の體。そつと這ひ入り庭陰に忍びて樣子を窺ひゐる。地色五右衞門詞も差足に。詞久しう逢はぬにまあ壯健で。そうして爰にはどうしてぞ。あぢな所で逢うたのと。地問はれて女房詮方なく。あぢな所であぢな出合ひ。顏見て私も胸がふくれた。詞ソレ覺えがござらう。都御追放の節。自らには暇の狀。五郎市は預けると。くれ〴〵のお詞。地大事と思ひ四五年も辛抱はフシしたれども。地色何するすべも女の手業。爲ん方盡きて此家の奉公。詞五郎市は丁稚ぶん。私はアノ子を生んでから。マア下女ぶんのがてら奉公。地それはさうぢやがお前は以前の氣もなほらずひよんな商賣。そうして今は何處にぢやえ。詞どこは久しう故郷へ歸つてゐたれども。物が見えぬと五右衞門と又してもどやをもむ。兄めが顏も見がてらと上りどとは上つても。都の内へは足踏ならず。やう〳〵大津に足を留め。知らぬ異服商賣より知つた小糠商と。まあ手なれた事をしてゐる。是といふも子の無い故浮世豈分五リンの暮し。そなたに逢ふたら兄めを取戻し。外の商してみる氣。勿體ない事ぢやが此商賣にもほつと飽い

た。五郎市を戻してたも。ヲ、戻しませうさりながら。今は此家の旦那殿。親やら主やら義理ある中。其留守の間へ家後切。盗人殿が入られて。それが即ち父親で。五郎市を戻したと。私が口からどうもいはれぬ。表向から畫中に。迎ひにどんせ戻しましよ。ハテこな人は。畫中に京へ來ると又むらへかまれる。旦那殿へは駈落したというて。今夜幸ひぢや連れて去の。イヤさうはなりませぬ。ならざいつそ盗んで去のか。盗ます事は。サならずとどうぞ。インヤ。はて。なりませぬ。エ、面倒な女め。地五右衛門が連れ歸るに誰が點を打つ。引連れて立歸るとフシ奥を目がけ駈入るを。地主庭より飛んで出で。素首取つて引戻し。立塞ればおりつは吃驚ひよんな出合とフシ氣をもがく。地五右衛門苛つて。詞ヤア汝は此家の主よな。俺が子を俺がでに。連れ歸るを地邪魔するかと。摑みかゝるを確と止め。有無をいはず引擔き。投げんとすれども此方も曲者。身を躱して振解き。取手柔道の早業も互に外し潜りあふ。傍ではおりつはあぶ〳〵と。いづれを押へいづれをば制し止めん樣もなくフシうろつくばかり急くばかり。地後は互に髻髪摑み合うてどつかと坐し。息も切るれば主は聲かけ。詞それ女房水一つと。いふに此方もコレおか樣。慮外ながら俺にもと地こはれて胸は氷水フシ解けぬ思ひぞ切なけれ。地主は怒の聲あらゝげ。詞汝盗賊今宵ばかりと思ふかや。いつぞや美豆野御牧にて。騙り取つたる五十兩。多くの人を切殺し立退いたる重罪人。地縄掛けずにおかうかと。思ひもよらぬ一言に。五右衛門ぎよつとし持つたる髻撓ぎ放し。詞ムウ。其譯知つた貴殿は何人。ヤ何人とはと拔き放すマ、マ、〳〵待つた〳〵。其金は扱ひ金。騙のわけを知つたは如何に。ヤア吐かすまい。割内やらぬ腹立に。一味の非人が訴へ。某こそ其時取扱ひし侍當馬之丞。見忘れたか愚人め。騙り取られし越度により。知行に放れ此所に逼塞。地汝が首取り再び歸參の願ひをする。フシ覺悟ひろげと詰寄すれば。詞ヤレ逸るまい。尤も〳〵。何と其金五十兩。お戻し申そが御了簡はあるまいか。ヤア狼狽者め。其金は若殿のお遣ひ金。則ちお里の金役人。岩木兵部の名判をする。かけ屋の極印明白。外の金で事すめば。其時調へ返納する。今更拵へ首代とは。卑怯者めと言はせも立てず。イヤ今更ならず。其時の金。返辨申すと懐中より。地取出し投げ出す五十兩。包の封印其儘に嗜み持ちしはフシ不思議なり。詞ムウ合點のいかぬ。扨は汝は榮耀にひろぐ盗賊な。貧苦に逼り盗みせば。今迄此金持ち貯よ

う筈はなし。地重々の科人と。極付けられて眼を瞬き。詞榮耀にするとはお情なし。地心ある御方と見こんで恥を明し申す。詞必ず他言御無用。もと某は。腹からの盗賊にもあらず。則ち其金の上包に。金役岩木兵部と。判形するたは某が實の親。ヒヤア。ヲ、おりつも此儀は知るまじ。いかなる事にや三つの時。此一腰を相添へ。伏見の野はづれに捨てられ。河州石川の百性に育てられ。人と成つて都へ上り。心悪黨ゆゑ邪人仲間へ入込み。意に所を追拂はれ。又故郷へ歸れども足も留らず。御自分を騙りしも。何とぞ其金にて武士にもと思うた時は本心。騙り了せ上包をよく見れば。岩木兵部と父の名銘字。封じ目にしつかりと魂の判形。地いかに盗賊すればとて。現在親の魂を。切裂く事も勿體なく。幾度か手は掛くれども。ギン名判に恐れ只今迄ウツシ堪へ〳〵て貯へし。地色佛體受けし人間の本心實ば變らねど。貪慾邪智の上臺り。はれるは臨終今はの時。それ迄待たず當馬殿。本知にかへる種ならば首とり給へ惜しからずと。近付き寄りて差付くる。侍勝の根性に盗賊さするは惜しかりし。地色始終を聞いて當馬之丞。詞ムウ岩木兵部殿の御子息。稚き時は友市とはいはざりしか。ハテよく御存じ。ヲ、存じた筈。拙者は江州より兵部殿方へ養子に參り。若殿に付き美豆野お館へ奉公。ム、すりや親々はひとつか。いうて見れば行



合ひ兄弟。アノ御自分と。ヲイノ。地是はとばかり手を打つて フシ呆れ果てしが。地當馬之丞何思ひけんすつくと立ち。刀すらりと拔放し。手水鉢に打ちつけ〳〵。打ち折つてからりと捨て。詞誠に鳩に三枝の禮あれば。烏に反哺の孝あり。盜みはすれど親の事。忘れぬ性根あつぱれ〳〵。其心に免じ當馬之丞武士を捨て今日より町人。ソリヤ何故な。なぜとは。武士を立つれば御自分の首取らいで先知へ歸られうか。親兵部殿にも。御存生にて折ふしは仰せ出され。此友市は何とした。太刀錆びになる相ありしが。佛神の加護あつて。人並に生立ちしかと。老體の病身は苦になされず。地御目の内に涙は幾度。詞何とぞ本心に立歸り。御健勝の内御對面あられよ。地性根の直らぬ内は某とても吾信不通。お歸りあれこれ限りと立上れば五右衛門は。親の堅固の嬉しさと侍捨てゝの惠みとに退つて三拜 フシおりつも嬉しく。地色永居は無用と引立つれば。小腰折り〳〵折あらば。此お禮をといふしほに。差詰めたりし門の戸を。開くるおりつは事なき内と フシ心急きたつ主は見ぬふり。詞コリヤ〳〵女房。盜みにはひりおめ〳〵と。手ぶりで去んでは本意なかろ。何によらず望の物やつて去なせよ。アヽ申しそりやあんまりお情過ぎる。見れば諸色も餘程不足。ヤレそれは高の知れた浪人の貯へ。何惜しからん。まだ其外に。心のなほる絆足。二人が中の。ナ。子盜み 地さして去なせいと氣を付けられてハツトばかり。やがて五郎市呼出し フシ手渡しすれば。いとゞ尙嬉しさかぎり涙ぐみ。重々の御恩何として報ぜんと。手を合すれば其恩は此。子盜みを元手とし。商賣替へて見せられよと。深き情の敎訓も。緣にひかるゝ友綱や末は。首枷首綱と。知らで伴ふ。ギン子故の闇明け方。近く 三重へ別れける。ギン針に引かるゝ。糸筋や。廓を。出でて五右衛門が妻と定まる瀧川が。素人の業を仕習うて。フシ洗濯物の縫くゝり。フシ忙しき中へ五郎市を連れて戻つて襤合す。親子の中のそぶ〳〵は。絹の表に晒裏。フシ肌つき惡く暮しゐる。地色來る人毎に惡者の。三上の百助堅田の小雀。遠慮もなくずつと入り。詞エお瀧さま縫仕事。御精が出ますの。コレハ二人づれでようこそ。主は畫寢。地何ぞ用ならいひ置いて。詞イヤ用というて商賣づく。コレ此小雀が在所。堅田の落脂屋に嫁入があつて。しつかりと土產。躍りこむ相談に暮方から金藏所へ寄合ひます。扨と。雀よ。次手に今のをいはぬか。汝いへ。ハテ言ひに來たぢやないか。そんなら餘の事でもどんせぬお瀧さん。昨日爰の五郎市殿が使に

來て。今の母様のあたりが懇にむごい。わび言してくれて〻如才のない言ひ様。十一や二で思ふ様にはあるまいし。コレコレ雀殿。憎うてむごうしませうか。サア〳〵そこもあるてや。あんまり可愛いと胴慾がまじつて繼子憎みになるもの。ハテ異な事の挨拶。繼子を憎むが天下の法度か。こなた衆の所へまで。地懺悔をいうて行く息子。あんまりかはゆうござらぬと。一蹴蹴られて道理々々。詞百よ。聞いて見ればおか様のが尤もさうな。繼子憎むは世界の大法。とかく息子が腹借らぬが誤。公事はさばけた來い去のと。地差別知らずが燃える火に。フシ焚附かうて立歸る。地つらき親をば親にして。猶も機嫌をとる端香。愛想に汲んで五郎市は。しとやかに立出で。詞申し母さま。お氣が盡きやうと思ひ茶を入れました。地出ばな一つと差出す。はや小雀がいひしを根に持ち。詞何ちや茶をいれたそりや誰が頼んで。そなたが飲んだ飲みあまり。口ふさげに持つて來たか。地アノ勿體ないなんの飲餘でござりましよ。初穂を汲んで參りました。詞ム、初穂を飲まして。此母を追出すのか。飲めなら飲まうドレおこしやと。地挽ぎとる拍子に情なや。仕立てし布子にさんぶりと。かゝりや繋がる親子とて。フシあひ見る茶とぞなりにける。地色我が誤も子に嫁する。まゝ母性根を驚して。詞ヤイこゝな麁相者。代りのない晴着。地よう此様にしたなあと。取つて引寄せ太股を。指先強く二つ三つ四つめの紋のつかみ染。ナウ悲しやと五郎市は逃げ廻り手を合せ。誤りました今度から。嗜みませう堪忍と。フシ詫びる目元もおろ〳〵涙。詞又泣くか。地吠えるかと。聲はしたなきフシ折からに。地色人の女房の上水を飲みに廻る小鮒の源五郎。門口より差覗き。詞ハテこりや又親子喧嘩でえすか。性慾もない息子殿。地笑止な和郎と座を占めて。詞コレお瀧さん。繼子の世話をやかずとも。俺が言ふ様にならんせんかいの。地人にばつかり思はせて。フシ氣強いお人と當擦る。詞又小鮒殿のじやら〳〵と。そんな機嫌ちやないぞや。地あつたら口にはお風〳〵。詞サア其風に實が入つて。傍へ寄ると震ひ付く。機嫌なほしにちよつと爰をと。地手を取つて無理に引込む太股ふつつり。詞アイタ、、。こりや繼子殿の相伴だ。地扨も手ひどい御馳走と。顔をしかめて擦りぬる。詞ヲ、よい氣味の。傍に告人のあるも構はず。地好んで痛いめなさるゝと上手ごかしを。コリヤなると。思うて何がな追從に。憎む繼子を取つて引立て。詞告人とは此和郎か。目離のないちよつぽり殿。地奥へ行て貰はうと。むごいを馳走

に。ッシ蹴飛ばせば。地五郎市むつと目に角を。立てがひもない親の前。詮かた涙押隠し。オクリ泣く〳〵〳〵奥にッシ入りにける。地サア見る人もなし聞人もなし。主のあるこな様に。いひかけるから命づく。首を先へ投げだそか。胴から下を受取る氣か。はずみ切つたお返事をと。ッシしなだれかゝるを。そつと外し。詞夫五右衛門幸ひ宿にゐらるゝ。其通り申聞せ。地急度お返事致させんと。立上ればア、是と。詞それいうて堪るものか。よい〳〵さうあるからは此方も意地づく破れかぶれ。御大切に思召すお配合の芥藻屑。いふ所へ行て申すちや迄。地お暇申すと強請りかけ立つをお瀧は引留め。詞ソリヤこなたも同じ仲間。サア其仲間がいふからは慥かな證據。首投出してと申すはこゝ。惚れかゝるとぞつとん火へ陷るも構はぬ氣。地なんと一度か二度の事。ヲツトいふ氣はごんせぬか。詞そんなら一度で大事ないか。半分でも忝い。幸ひ傍に人はなし。表を鎖してつい爰でと。地抱き付くを氣疎。それ〳〵親仁の足音。詞アイ〳〵呼ばんすもうそこへ。地そりやこそ爰へ出て來るわと。威せばうろ〳〵狼狽へるを。無理に押遣り押出して。晩に〳〵と一寸のがれ。二寸延びたる鼻毛の小鮒。内儀の泥に酔はされてッシ跡をも見ずし逃げ歸る。地色五郎市様子聞きながら。聞かぬ振にて奥より出で。詞申し母様。父様のお目が醒め。夕飯上ろと仰しやる。地わし据ゑましよかと問ふも恐々。詞ヲそりやおれがしませう。其代りに縫仕事取置いて跡掃いて。日暮れになつたら火を點し。門も閉め庭も掃き。地遣ひ水から風呂の水。いひつけずと汲んで置きや。子供遣ふもア、世話とオクリいひつゝ〳〵奥へ入る影を。打眺め〳〵スエ恨み。涙にくれけるが。思ひまはせば我が身程。親に縁なきッシ者あらじ。地色眞の母様ある時は父様に氣兼する。今又父様ほんのなら。母様が隔りて善き事しても氣に入らず。そと町より來る者まで見侮つて足にかけ。蹴たり踏んだり何事ぞ。此家にうか〳〵暮すなら。まだ此上にどのやうな恐ろしい目に合ふも知れず。何國へなりとも逃げ行かんと。表をさして駈出でしが。ほんの母様の所は覺えず。どこを先途と立戻り。又駈出しては行く先の。あてのないのに引かされて。行つては戻り戻りては。巷に迷ふ稚子の。ッシ途方に。暮れてゐたりける。地色五右衛門は寄合の。時分ならんと立出でて。詞五郎市よ。何して地そこにと咎められ。イヤ何處いも行きやしませぬ。お前は何處へと問ひ返す。詞ヲヲ俺は寄合に。暇は入るまいつい戻ろと。地いひ捨て行く袂にすがり。詞モウ今夜

は何處いも。行かずと内にゐて下され。地さなくば私も連れて行てと。おろ〳〵涙の體を見て。思はずも打萎れ。詞何故さう言ふぞ仲間事。行かぬと何かと後の邪魔。地ちつとの間ぢや留守しやと。賺せど猶もしく〳〵と。フシ涙に聲もおど震ひ。詞とゝ様。私はほんのかゝ様に逢ひたい。地去して下され去にたいと。泣き萎るれば五右衛門も。胸は張裂く思ひにてしばし涙にくれけるが。詞ホヲヽ、道理ぢやさうあらう。常から女房めが仕方。いかに己が子でないとて。朝から晩まで責め遣ひ。ちつとの事も大仰に。又しても打ち打擲。酷い奴憎い奴。もう引捉へ言はうかと。思へど胸を擦つてゐる。腑甲斐ないと思はうが爰をよう聞け。父はな。悪い商賣してゐる。今止めたう思へども。仲間事ゆゑ止めさせぬ。それをあの嗅めがよう知つて。眶見ての我儘氣まゝ。地今追出したらやら腹立ち。どんな事を吐さうやら。殊に彼奴が親は悪者。忽ち其方や俺が身に。難儀のかゝるが悲しさに。何事も堪忍する。詞子心にも聞分けて。了簡つけてゐてくれい。眞の母にも他人が添ひ。今さら戻すも戻されず。地色其うちに思案して憂い辛い目をさせまいぞと。いひ慰むれば五郎市は。涙を袖で押拭ひ。詞父様の苦になる事なら。打たれても抓られても。堪忍してゐませう。地其代りには何處へどざると。早う戻つて下されと。フシいひつゝ猶もしやくり泣く。詞ヲヽ、聞分がよいよ。惣別堪忍といふ事が人は肝腎。男と生れ堪忍のならぬは女房の間男。さては人中の面恥。拳一つ當てられてもそこは男づく。其外は皆内證。堪忍が卽ち辛抱。地ちつとの間の留守。辛抱して待つてゐや。つい戻らうと懇な意見ながらの言聞せ。それが小耳にとまると。知らで五右衛門寄合の時分遲しと出でて行く。地是非も涙に門をしめ。内の灯火庭廻り。いひ付けられた荒地を。フシ片付け廻る折柄に。地色お瀧が親の無頼者。三二五郎兵衛しらにせの。指先うごく髭親仁門の戸たゝいて。お瀧〳〵と呼ぶ聲す。五郎市扨は最前の。小鮒が來たと心得て。わざと其場を知らぬふり。フシ聞かぬふりして奥に入る。地色猶も忙しく叩くにぞお瀧も心ならねども。誰ぢや〳〵と咎め出で。俺ぢや開けいは親の聲。又用無心か氣の毒と。思へど是非なく内へ入れ。詞日も暮れたにうと〳〵と。地何しにおいでと尋ぬれば。詞何しにとは。娘の所へ親の來るが不思議か。地あた面倒なと膝打捲り。詞いふまいと思へどいはぬが損。聞くうちぢや聞けお瀧。此中借つた二十兩。昨夕五三たでころりとしまひ。跡をつなぐ種が切れた。五右

衛門は宿にか。まあ十兩か廿兩。借る氣で來た言うてくれ。近年見たがはやり出て。ア、胴も合はぬぞいと地咄し出せば。詞ア、もう其咄聞きとむない。地小判の生る木もあるやうに。又しても無心。主の手前へ私も氣の毒。殊に今夜は留守。マア往んで下さんせ。詞イヤ往ぬまい。汝こそさういふ五右衛門は。金の生る木があるげな。毎晩々々甘い商賣。元手入らずの掻取り。ようごろが來ぬなあ。今夜も働きの留守ならば戻る迄待たう。むすめ。けん〳〵言ふなやい。何にも知つてゐるぞいと。地底氣味わるき一言に。くわつと胸まで迫上し。詞コレ親仁さん。人の事でも大事小事。あじやらにも言はぬもの。いうてよければお前もの。京の嶋原で置土の九郎次を殺し。難儀に及ぶを五右衛門殿の。思案一つで事無うしまひ。親子共に恙なう。今日迄暮すは誰が蔭。地其恩を知つてなら苦口いはんす筈はない。金借る度にいたかはなせ。さう胴慾にはいはぬものと恨み歎けば喧しい。詞そりや有つて過ぎた事。今でも金を借せばよし。いやといふと此村の庄屋へ行て。夜の商賣いうて來る。地それとも五右衛門が心底次第。戻る迄べん〳〵とかうしてもゐられまい。寢所せい寢てゐよう詞そんならどうでも逢ふ氣かえ。逢はずといつて庄屋殿へ行こか。サアそれは。なんと。地色ハテ寢て待つ氣なら此一間。寢所して上げましよと。暗いをふせぐ明り障子引開くれば。詞ヲ、よい合點。汝も五つから俺が手じほ。いつ孝行な事もない。來てちと腰揉め足擦れ。嫌といふと庄屋殿と。地威し立てられ是非なくも。ハテ撫で擦りで濟む事なら。致しませうと伴うて。入るも疵持つ足の裏。オクリ篠原へならぬ フシ藪垣の。フシ隔つる思ひに。五郎市は。小鮒と心得奥の間の。親の差添そこ退と。尋ね廻れど知れざれば。勝手の戸棚を心ざし。捜し當りし修羅の一腰。そつと拔取り小脇に掻込み。おのれ最前蹴た意趣と。父の眼を拔く不義者め。たゞ置かうかと忍び寄り窺ひ聞けばお瀧が聲。詞申し。お前とわしとは因果な緣。切らうというても切られぬ。今にも夫が戻られては。意地づくでどうならうも知れず。私可愛いと思うてなら。まあ往んで下さんせ。イヤ往なぬ。小言いふと五右衛門を。逆磔にかけさする。殺そと活そと俺次第と。地廣言吐くは憎さも憎し。往ぬる所を殺さうか。詞寢てゐる所を突かうかと。脇差拔いて子心に取つつ置いつの一思案。地色かくとも知らず五右衛門は。さぞ待ちかねんととつかはと。歸る表の足音を。人こそ來れと五郎市は。心急くまゝ障子越し。ぐつと突

いたはお瀧が胴腹。わつと魂切る聲に驚き。ヤレ人殺しと三二五郎兵衛ワシ奥を指して逃げ入れば。五右衛門門の戸蹴破つて。見れば女房朱に染み。五郎市は人違へと。うろつくを取つて引寄せ。詞ヤイ悖。恨あるは道理ながら。母と名がつきや親殺し。辨別知らぬか痴呆者と。地叱りつくれば聲ふるひ。詞母様を小鮒めが女房にしをる故。小鮒を殺すと思うたら母様でござつた。地堪へて下され怪我であつたと。あどなき詞も聞答め。詞何といふ。嘸と小鮒が不義したとや。其又相手は。奥へ逃げて行きました。地扨はと目がけ駈行くを。ノウこれ待つてと手負は呼びとめ。詞其逃げたのは私が親。三二五郎兵衛殿。あの子がそれと知らぬも尤も。今日畫小鮒が無體の戀慕。嫌といへば身を捨てゝ訴人に出ると阿房の一徹。地もしやと思ひ宥めて歸し。今宵忍んで來る約束。思ひもよらず。親仁殿が見えまして。詞又金の無心。お歸り迄待つとて。一間にわしと差向ひ。小鮒と思ひ違へたは。地あるまい事では無けれども。親と名のつく自らを。殺してあの子の身の科が。何とあらうとそれが悲しい。やつぱり不義で見付けられ。自害と沙汰して下されと。スエテ思ひ過ぎする。心を疑ひ。詞ヤアしら〳〵しい。左程いたはる五郎市を。是まで酷く責め遣ひ。今さら悲しい不便なとは。地追従らしいおけ〳〵と。つつけりいひ出す詞の内。苦しき身體押直り。詞コレ五右衛門殿。今死ぬる身が何の追従。こなたは又五郎市に。何老舗の何商。何さす胸で連れて戻つた。地色女房にさへ暇の狀。まさかの時は他人向と。常からのいひ聞せ。男の子は夫に付き。どう言ひ抜けても。ワシ遁れぬぞや。地色たとへ別儀ないとても。鬼でもならぬ恐しい商賣。こなたはそれを讓る氣か。可哀さうに美しう。生れついたあの顏を。擡木の上に曝さうかと。それが悲しさ愛しさに。追出す種の無得心。早う此家を逃げよかし。母御の方へ去ねかしと。打擲するもこなたこそ。一生その身で果つるとも。せめてあの子は。人にしたさにと。わつと泣入る眞實を。地聞いて五郎市泣き出し。かゝ様堪へて下さりませ。何にも知らいで恨みました。ひよんな事して切りましたと。悔み歎けば五右衛門も。至極の涙に咽びながら。詞一寸の虫にさへ五分の魂あるといへば。まして我とても悖を連れて歸りしより。たとへしつけぬ荷歩行持。人の竈を廻つても。ふつつりと止めうと善心に。もとづく甲斐も情なや。地色同類數多に絡まされ。止めうというても止めさせず。翅鳥にかゝる此骸。追付刀の錆屑と。なる身をせめて

そなたとなう。代つて死んだら果報ぢやに。科なきそちは先へ立ち。罪ある我は引殘り。責め訶まれ死ぬるであろ。墨の上での臨終は。羨しいと搔口說き。ヘルフシ男。泣きにぞ泣き居たる。地色今はになりて五郎市を。引寄せて打眺め。詞愛しや是迄氣の苦勞。怪我でないとて殺すをば。無理とは更に。フシ思はぬぞや。地色其代りに佛壇に香花きらして下さるな。四十九日は家の內に。迷ひゐるとの事なれば。直に手向を受けませう。名殘惜しい我が夫。苦しいわいのといふ聲も。無常の嵐一吹に。吹き散らされて敢なくも。フシ此世の緣は切れにけり。地ナウこれ母樣母樣とすがる我が子の歎より。堪へかねたる五右衞門が。身を震はして嗚り泣き取亂したるフシ折からに。地色一間の內より三二五郎兵衞。始終を見屆け飛んで出で。詞ヤア遁れぬところ五右衞門。餓鬼めは卽ち親殺し。此旨上へ言上と。地いひ捨て既に駈出すを。南無三寶と飛びかかり。何の苦もなく引摑み。有無をいはす氷の刃ぐつと突込み一刎り。刎る間に向ふへ提燈。人こそ來れと死骸を投げ捨て。やがて我子を引立て。詞是からが身の大事。そちも親を殺すれば。我も身の命を取る。二人共に親殺し。地此場にゐられずサア來いと。肩にフシ引掛け出る所に。約束時分と小鮒の源五郎。のろのろと小提燈。明りにそれと見るより五右衞門。此奴故と飛びかゝり。躍り上つて

眞一つすぐに立退く八聲の鶏。こつか高野をあてにして飛ぶがご。とくに三軍へ出でて行く。

下之巻

身の科を。歎へゆく身の果敢なくも。地翅鳥にかゝる五右衛門が子に引かされて遠近の。人目を忍ぶ破れ笠。子にも小笠を拾ひきせ。三里夜の内明方に伏見の里の藤の森。街道筋に着きけるが。地貯へなければ五郎市に認めさする便りなく。途方に暮れてゐる折節。長袖武士と思しき乗物。八幡下向の朝戻り何恐れなき物詣と。見込んで五右衛門近く立寄り。詞麁忽ながらお乗物をお待と見うけ。旅疲れの浪人がお願ひの筋あり。地御聞届けと餘儀なくも。言ひかけられて乗物を傍におろす其内に。地五郎市に指さしたる脇差取つて小腰をかゞめ。詞

某一人の悴を連れ。長途の路銀遣ひきらし差當つての離儀。何とぞ此一腰。御求め下されなば御恩ならんと差出す。地乗物開き出づるを見れば七十越した白髪の老人。悠々と。挟箱に腰打掛け。地目鏡を力に一見致さん。詞どれお腰の物と手にとつて。地ためつすがめつ。詞ム、鍔はかんとう身はせき打。地見れば鬼る程其昔我が子に付けて捨てたる一腰。ハツト驚き。詞これ〳〵旅人。是は他所より求められしか。地もとの出所不審しと。詞の内より。詞イヤ御念に及ばず。即ち某悴の時分。

後の印と親共より。添へ置かれたる一腰と。地聞くより扨は我が子かと飛付く程に思へども。豫てよからぬ噂は聞く。今の風采家來の見る目。かたゝ愧ぢて心を鎭め。詞ハテノウ左樣かしてあつぱれのお道具。なれども持人の根性が刃物にうつり。あつたら事は落ち難い錆が出ましたよ。切先にこぼれ疵。疵ある性は直り難く一生が亂れ燒。鍔はねぬけ。古いをおもと賞翫すれど。友傍輩の附合が惡しく。地金をあらはすもめんずれ。地目貫の龍は後藤なれども。勢なきは雲霧の間に住むべき所なく。逃げ彷徨ふ有樣。詞自慢の鮫も出所はよけれども。親が放れて他人むき。地子は子と思へど傍あたりに。目利があれば初の生れといはれぬ〳〵。詞はてなうあつたら恰好で。見すぼらしい此脇差。地色老の見る目も情なしと。物に寄へし心と知らず。詞イヤ是まで幾人か手覺え。悴が僅かな小腕にさへ突留めたる業物。拵に構はずとも地切れを見込に御求めと。いはせも立てず。サア〳〵その幾人か手覺が尙氣遣ひ。殊に御子息の小腕。突留めたとはハア心許なし。御存じない興物語なれども。某もその昔男子一人儲け。仔細あつて捨て申した。地色もしその捨てられた悴。御自分のやうに流浪致し。親に捨てられずはかうあるまいと。恨うかと存じお咄申す。詞若き時分月も忘れず正月庚申の日。お館は庚申待。奥女中に戯れ。一夜の契に子胤をおろし。生れたは月足らず九月廿日。又是も庚申の日。庚申の夜盜をすれば顯はれ。其夜懷胎の子は必ず盜するとの俗說。地色信ずるに足らねども里にやれば突戻す。養子にやれば目遣ひが惡いと厭うて貰人なし。仕官の身の是非もなく此里の野はづれに捨て。河内の土民を賴み。拾ひ養ひ貰ひしが。人と成つて都へ上り俗說に違はず。事を仕出して都を追放。扨こそわがため敵ぞと。思ひ切つてはありながら。次第に寄る年くる日數。人懷しき折柄は思ひ出して我と我が。心に行方をとふばかり。もし其許の所緣の內心當りの人あらば。地傳へてたべと打つけに。いひ聞かされて五右衞門は。その捨子こそ某と。言はんとせしが。詞いや〳〵〳〵。地聽きお心脇差でそれと知つても他人むき。殊に我は重罪人。後の咎もいかゞぞと。心付きてよそ〳〵しく。詞ありし昔の物語我が身のやうに存ぜられ。思はず落涙致しました。定めてその後其子息氣も改り申さんが。情なきは是迄の罪滅せず。今にも繩目の恥を受け。親あるなどといはれては不孝の上の不孝と思ひ。地わざと見ぬふり聞かぬふり。よそにあしらひゐられましよ。と斷いへば。詞その心ならまだ

しも。地色せめて其許の子息を我が孫と思ひ。餞別を致さんと金一包取出し。詞黄金は朽ちても朽ちせぬまつ其ごとく。悪事も亦末代まで其名は朽ちぬと心得。親の性根を見習ふな。地色對面も是限り。後世菩提はいづれとも。弔ふべき者は。定らずと泣く〳〵立つて一腰も。共に渡して乗物へ。涙隠しに入り給へば。しばしと留むる甲斐もなくはや乗物を舁き上げて。フシ心もなげに急ぎ行く。地跡懐しく五右衛門は打萎れ。フシ涙ぐみ。地現在親を親とせず子を子とさせぬは我がなす業。此罰にても極重の。罪科のがれず浅ましやと。先非を悔いてしやくり泣き。フシ詮方もなき折柄に。地自業自滅の時來り追手と思しき捕手の役人。それ五右衛門よあますなと四方よりも追取巻く。コヽ叶はじと五郎市を崇道の宮へ押遣つて。其身は封疆を小橋にとり。力士のごとく踏跨り。段平刀抜いて待ちかけたり。捕手の小頭早野彌藤次捕縄手操つて詞ヤアヤア五右衛門。是迄なしたる悪事の段々地縄をかゝれと呼はつたり。地五右衛門ハツト止の事。思ひ出して後悔も。かなはぬ所と胸をすゑ。詞これ〳〵役人。舅

残らず顯れ。其上舅を手にかけ。悴は母を殺したる様子。三二五郎兵衛に止を刺さるゆゑ委しく白狀。遁れぬ所腕まはせは勿論女房も某が殺したり。悴が存じた事にもあらず。彼が命をお助けあらば尋常に縄かゝらん。さもなくば死物狂ひ。

有無の返答承らんと身構す。ヤアいらざる悴を庇ひだて。はや先だつて上聞に達し。親子共同罪との仰せ。地かなはぬ事と聞くよりくわつと眼を見ひらき。詞さうお言やると片端切つて〳〵切拔ける。搦めとらば取つて見よと。地いふより飛付く捕手の人數。得たりと眞向後袈裟。三の胴の車切り。腰骨脊骨きらひなく爰を最期と三重へ切散らす。地さしもの捕手も手にあまり。加勢を入れんとひしめく所へヤレ暫くと聲かけて。親の兵部は老足の心も空に取つて返し。小頭に打向ひ。詞科人は石川五右衛門となる。仔細あつて彼めには重々遺恨あり。地色某に御渡しと。願へば彌藤次。貴殿は何誰。詞三位中將が家來岩木兵部。ムウ今御發向の諸太夫據は無けれども。中々老體の手に及ぶまじ。地お怪我あつては氣の毒と。聞入なければ押返し。詞もし捕り損じ候はゞ。老の皺腹致す迄。地武士は五の遺恨ばらし。是非にと餘儀なく ッシ賴むにぞ。地色然らば加勢なされよと。指圖嬉しく向ふに進み。詞コリヤ〳〵五右衛門。以前の意趣をはらさんため岩木兵部が向うたり。切拔けるなら拔けて見よ。老の手並を見せうぞと。地表は怒り落ちよかし。逃げよと知らす眼つき顏付。扨は助けて其代り腹召されんとのお心か。ハテ是非もなや此場こそ。我が絶體絶命と。思ひ定めて。詞コレ〳〵兵部殿。成程恨をはらさせんが。心入あり貴殿の養子。當馬之丞を呼びにやられよ。地一言申す仔細ありと用ありげなる詞のはし。詞ヲ、幸ひ某迎ひのため。稻荷まで來てゐつらん。地色それ呼び來れと早使。忙しき中に双方がッシ一息ついて待つ所に。地程なく來る當馬之丞。かくと見るより吃驚。驚隱す五右衛門かけ聲コレ〳〵當馬。詞我が運命今日に極る。親父が遺恨をはらさんとて向はれたれども。捕り損じ切腹召されん事笑止に思ひ。手にたつ貴殿を呼びに遣はす。地親に代つて働かれよ。用捨はないと立向ふ。是ぞ以前の恩返しと。早くも悟つて當馬之丞。詞心さし奇特なれども。今町人になりたる某。武士でなければ手柄望まず。切拔けなりとも。勝手次第と言ひ放す。ヤアその町人には誰がしたぞ。刀を折つたその恨み。今はらさいで何時はらす。一生氣樂に町人とは。養父へ對して大不孝。とても遁れぬ五右衛門が命。他門へ渡して心がよいか。地狼狽者とッシ氣をつけられ。地何さまもはや遁れぬ所。他へ渡しては本意ならず。せめては彼が志。無足になさじと身構へし。詞ホヲ、盜賊はすれども流石は筋目。先知に代へし養父の家。相續させんとは祝着〳〵。さりながら。得心の繩かけて

は役なし。誠切拔ける所存ならば。あつはれ手柄に捕つて見しよ。ヤア一旦は男づく。此上何故用捨せん。捕手數多の見る前。潔う我捕れよ。捕るぞよ。捕れよ。サア。サアと地悦みあへども心は一致。こなたは首尾よく捕られんと フシ目處を外して切付くる。地逃がば逃げよと捕りかぬる。親の兵部はあぶ〳〵と養子が手柄も望めども。現在實子が虎口の命。助けたや逃したやと。老の思ひは千變萬化。捕手は四方に目を離さず遁れ難なき罠の口。程よく五右衛門切込む拍子。躍き伏すを取つて押へ。是非なく繩をかけるうち。役人社内に駈入つて五郎市を高手小手。親子を共に番ひ鳥。なく音は老の胸の內。共に悲しむ當馬之丞。凋れし聲も御法の呼はり。詞盜賊の張本。石川五右衛門親子の者。窄屋へ引けと引立てさせ。地行くも涙の柵や繫がれつなぐ緣の綱。結びついたる行合兄弟。千筋の繩も跡につき。共に警護の。うし綱や是非なく。〳〵も三遍〳〵引かゆれくタ、キつくりおく。ギン罪が須彌ほどあるならば。ギン閻魔の廳につけ所。ナホス なしと五道をフシ踏み迷ふ。あさき石川五右衛門が身より出せる錆刀。なせし惡事の無量業。スエ數は船にも車にもオクリ罪科。重き親と子を乘せたる駒の首綱や。かゝる憂目にあらけなく。絡み付いたる縛は。暗き〳〵冥途のフシ鹿島立。二條大宮東へとギンオクリ引かるゝ。道に立集ふ群集をはらふ警護さへ。長地聲をひしぎの割竹はさながら訶責きらめきし拔身の槍も此世から。劍の山か焦熱の。油の小路沸らして小オクリ小石。小川も諸共に同じ處刑に釜の座と。氣を空蟬の烏丸。かはい。〳〵と人毎の聲を力に引かれゆく。子は父親の。成佛と後手に珠數くるまや町 フシあと見返れば。地五右衛門は我が子の姿見送りて。此身を先へ引かれなば見窄しげなうしろ影。見まじものをと胸迫り。スエ聲も涙にかきくれて。詞御見物のいづれもへ。かく我々を見せしめと。生耻さらすも前世の業。地本來一物なき時は。善惡。邪正の分隔。なしと思して一遍の。フシ御回向。なされ。フシ下さるべし。地大木になる 楠も二葉の時は童に。摘みとられどおのがまゝ。繁れば後に石となる。われが盜みもその如く。始めに思ひ止らず。一度はまゝよ。二度は大事か三惡道。今日といふ今日親と子が。釜煮の油責現世に報ふ阿鼻地獄。あると知らざる フシあさましやと。二人鉦タ、キ涙の限り聲限り。悔み叫べど其かひも。ないて歸らぬ身の越度國の掟を。フシ堺町。シナ地親

道行街の手向草

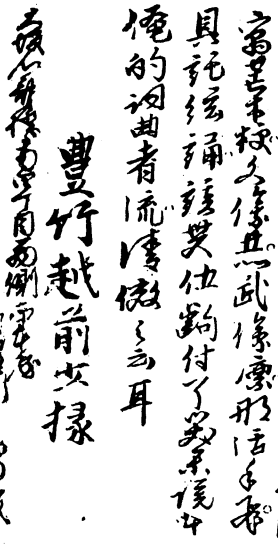
の咲きの聲につれ。又思ひ出す五郎市が。涙の顏を振上げて。此多勢の中にさへ母様はなぜ見えぬ。わしは他人の御回向を。うけずとも母様に。逢うて死にたい顏見たい。クル逢ひたいわいのと身を悶え。差俯向けば黑髮の中フシおくれを。傳ふつゆ涙。二人ハルフシ柳の馬場に。雨模様空かき曇り日陰にも。嫌ひ憎まれ世の人の疎み。はてにし身の上も。たゞ往生は三下リタヽキ麩屋町に。シテもしや佛の御幸町。ワキ心の闇をてら町と。シテさして行くみち法の道。ワキ逆縁ながら浮むべき。シテ賴みは彌陀の誓願寺。一念發起。菩提心。二人ギン子はまだ賽の河原ナホス町。菩薩の御手に招かれて。いざ松原と聞くならば五條の橋に取付いて救ひ給へと一心に。賴めとばかり敎へられ。頷くばかりクルフシ泣くばかりハルフシ見交すばかり。恩愛の溝き契の哀れやと。涙片手に見る人もキン見らるゝも夢世の中の。慾と惡とにこり木屋の フシ町をはづれて野嵐に。嘶ゆる駒の足はやみ最期場近くなりければ。見物群集とり〳〵に宗旨々々の手向草。題目。眞言念佛の。聲は高瀨や六字づめ七條。河原に三重へ着きにける

地仕置の場所は七條河原。二町四方に垣結ひ廻し。内に立てたる拔身の鑓。鼎にするゑし大釜はフシ地獄の。責を此世から。ハルフシ見に集りし。群集の中。先を拂うて早野彌藤次。岩木當馬も相役に。いひ付けられて是非もなく。フシ床几にかゝる後よりも。地色親の兵部は心もそら。叶はぬながらも立向ひ。詞承れば五右衞門を。此所にて釜煑とや。是迄盗賊の仕置は討首。地古來稀なる御制法といふを打消し。詞イヤ。それは彼が科のなす所。先づ立歸りの科二つには。去年嶋原にて平の平を殺し金をとり。三つには此度見を手にかけ。一味の輩を白狀せず。成程酷き罪に行ひ。同類をいはせよと用捨なき御上意。地役人の私ならずといひ聞かされてハツトばかり。返す詞もなき中に。詞然らは悴五郎市とやらは。實の母があると申す。さすれば親殺しとも申されず。地是は何故同罪ぞや。詞コハ改りしお尋ね。後の親を親とするが天下の掟。スリヤ是も通れずか。いつかな〳〵。ハ。ハレ地不便千萬と。よそにはいへど心は闇。スエテ老の奥齒を嚙締めて。フシ泣く音を隱すばかりなり。地かくと聞くより母のおりつ。息を切つて駈着けしが。夫當馬が今日の役目思惑いかゞと垣の外。うろつく内に引出すオクリよそのへ見る目も哀れなれ。ハルフシ親にも子にも。首枷の。脊に細繩のフシ菱の紋。締附けられし後手は。ホフシ鮓にかゞみて鍋に折れ。血の通ひさへなつ草の。燒付けらるゝ身の上

と。オクリ思ふ。心の。はかなくも フシ打しを。れてぞ座になほる。地彌藤次いかゞ思ひけん親子の縛解かせて。詞なんと五右衛門。樣々の責苦に落ちざれば。今日は釜の罪。悴五郎市を不便に思はゞ。一味の盗賊殘らず白狀せよ。地萬民の苦しむる賊徒。狩取らするがお上へ奉公。此理をよく辨へよと フシ柔を。以て問ひかくる。地五右衛門ちつとも悪びれず。詞御尤もの仰。殊にあれに御老體。相役當馬殿の思召にも。子は不便にないか。苦痛さするを思はぬかと。地御蔑みもあるべきが。たとへて申さば盗賊は國の鼠。取盡すに盡されうや。詞僅か手下の五十七十狩取らしたとて。さのみ天下の助にもならず。地萬民のためならば只用心に如くはなし。詞取らるゝ油斷あればこそ取る盗賊も出來申す。地五右衛門が最期の一句はかくばかり。詞石川や。濱の眞砂はつきるとも。地世に盗人の種はつきまじ。重ねてお尋ね御無用と フシ何の。にべなくいひなぐる。地色氣の毒あまり當馬之丞。詞コレサ五右衛門。其身は格別悴が苦痛。地又外々へどうつつて。誰が悲しみにならうやら。思ひはかつて白狀し。輕き罪にあはれよと。兵部や妻の心をば。フシ思ひやりつゝ制すれば。詞愚かの仰や。是迄妻子一家にも。語らぬ事をいひ合せ。大事を計りし一味の同類。地いづれをそれと名指しがならうか。よし白狀したりとて。悴が命助かるにもあらず。悪事をなさば悪事を立てぬき。釜に入らうが火に入らうが。未練な同類指すなどとは。思ひもよらず。詞ヤイ五郎市よ。苦痛というて半時か一時。死ぬるは切ないものと心得。父が子ぢや狼狽へな。熱いといふもちつとの間。地怖い夢ぢやと思うてゐよと。聽ませば何にもえ言はずに。しく〳〵泣いてゐる體に。強き心も弱りはて スエテ共に涙に沈みしが。人目思うて泣顏隱し。詞そちは死ぬるが悲しいか。卑怯な父が子でないぞと。地覺悟させんと耻しむれば。五郎市涙の聲ふるひ。詞卑怯ではない父さま。道々もいふ通り。地私はま一度かゝ樣に會ひたい。會はして下され拜みまする。死んだらモウよう會はぬ。それが悲しうて泣きまするとと。しやくり上げたる哀れさを。聞く親の身は身も世もあられず。わつと泣出す聲につれ。役人下僕も共泣に フシ袂を。搾るばかりなり。地色さすがに剛き五右衛門も。不覺の涙に沈みしが氣を取直し。詞それは何をいふ五郎市。母はそちが手にかけ。其科故この仕置。會ひたか冥途で會はしてやらう。イヤ〳〵それは後のかゝ樣。地初の本の母さまに。會はして下され會ひたいと。泣くを消しかね

答へかね。詞會はしたうても會はされぬお上の掟。聞きわけよ五郎市。父に如才があるものかと。地すがるも涙見る涙。コハリはや鼎には煙立ち フシ時刻移ると迫り立つる。地色未練と人や笑はんと五右衛門突立ち。我が子を取つて脇挾み。時一寸を待つも惜むに似たり。とても遁れぬ今日只今。いづれも念佛頼むぞといひ捨て釜へ フシ飛込めば。地色兵部當馬ははつと氣も落ち。堪へかねたる母のおりつ。垣押破り走り入り。ヤレ五郎市よ母なるは。可愛の者やと駈寄るを。當馬之丞押隔て。詞眞の母にもせよ縁切つたれば今は他人。其理を以てお祟なきを有難いとは思はず。何面目に我が子呼はり。近寄る事は叶はぬと。地差留められて聲をあげ。ナウ情なや恥かしや。我が子といへば盗人の。妻と定る恥辱にも。かへて駈出る親心。推量して只一言。暇乞さしてたべ。恨めしいは五右衛門殿。こなたの心を直さうばかり。五郎市を戻したに。共に悪事を見ならはせ親殺しとは何事ぞ。仕置も多いに釜煎とは。あんまり酷い胴慾な。かうなる事と知つたらば。戻すまいもの悔しやと フシ身を投げ。伏して泣きゐたる。地色釜の中より五郎市は。延上り〳〵。詞母様よう來て下さつた。會ひたうて〳〵。泣いてばつかりゐました。父様と一所にモウ爰で死にまする。死んだ後でも人殺し。親殺しといはれても。なした業なら是非ないが。盗人の子といはるゝが。地私や悲しい母様。人がいふなら言ひ消して。お前の子ぢやというて下され。詞御見物様いづれも様。親殺しも人違へ。怪我であつたと了簡し。地御回向頼み上げますと。わつと泣出す心根を。思ひやりつゝ人々も。フシ哀れと共に袖しぼる。地色五右衛門悲歎の涙ながら群集に向ひ聲を勵まし。詞この多勢の其中に。財寶を我に奪ひ取られ。よい氣味とも憎しとも。又仇なき其人は。不便とも思されんさりながら。めん〳〵我身の手本ぞと。地思うて念佛頼むぞや。詞盗の元は僞より起り。僞の始は身持から。若いお人は取分けて。色狂ひ小博突の。つばめを合はす筆のさき。地後に手先がはたらいて。主親の物他人の物。一人の方人二人の味方。三人五人と枝葉つき。止めうというて止められず。坂に車を轉すごとく。車は早く心はあと。悔んでかへらぬ釜の罪。我が身ばかりか悴まで。苦痛をさする悲しさを。推量あつて一遍の。御回向頼み上げまする。未練な最期も子故の闇。スエナ面目なやとせき上ぐる。地心を思ひ諸見物。兵部おりつは正體も。ないて返らぬ親と子の。フシ別れはさぞと知られたり。コハリはや顚倒の時來

り。釜に油のいきり立ち。たまぎり上る其音は。鳴神よりも恐ろしく。見る人ごとに。身の毛だつ。中に哀れは五右衛門が。我が子をかばふ其有様。親しき二人は氣も狂亂。さすがの當馬も顏そむけ。役目で責むる彌藤次も。白狀せよゆるめんと。いうたばかりに目もやらず。性根亂るゝ五右衛門が。子を思ふ氣の遣る瀬なく。片手に掴んで五郎市を。目よりも高く差上げ。暫しなりとも苦しみをさせじとこそは。身をもがく。油は次第に煮えあがり五體も。あからむ訶責の責阿鼻。焦熱を此世から。見る親よりも見せる子に。迷ふ心の不便さを見かねて當馬聲をかけ。ヤア〳〵五右衛門。とても遁れぬ悴が命。庇ひだてする見苦しさ。後で苦痛をささうより。なぜ一思ひに先だてん。血迷うたかと教へはげに。尤とは思へども現在親の手にかけて。何とせん彼とせんと。差上げたり下したり。見る苦しみは恩愛妹脊。叶はぬ時の今はの際。いなゝき響く大聲にて。五郎市父が先驅せよと。ぐつと突込む釜の底。其身も共に打重り。狂ひ死せし石川が。釜煎の跡淵となり。七條河原に名を殘す。釜が淵瀬の物語傳へ〳〵て今こゝに。豐の竹の一ふしに御代萬。歳を書き殘す



豐竹越前女掾

逆櫓松
矢籟梅

ひらかな盛衰記

詞頃は元暦元年正月二十日。朝日將軍木曾義仲。悪逆日々に盛なる。都の騒動鎮めよと。鎌倉殿の下知を受け。詞大手の大將蒲冠者範頼。勢田を指して攻上らる。搦手の大將には九郎御曹司義經。伊勢路を越えて上洛有る。オロシ へ心ぞ剛に。たくましゝ。地附從ふ輩には佐々木の四郎高綱。畠山の次郎重忠。和田の小太郎義盛。侍大將は梶原平三景時。其勢二萬五千餘騎。甲の星を戴きて ホオクリ夜靄。分ぬ旅なれど勇む驛路の鈴鹿山。本フル去年のゆかりと消殘る。江戸雪の戸ざしの籠の關。八十瀬に續く加太山。川を越えては コヘリ山路にかゝり。山を越ゆれば川瀬にひたり。西へ〳〵となびく旗手に。東風が知らする風の森。ナホス地朱の玉垣見えたるは如何なる神か白幣。敵追討を祈らんと。暫く床几立てさせて フシ皆々。休らひ給ひける。眺むれば。山より山の山道を。腰も二重の老の杖を便にとぼ〳〵と。咀を傳ひて フシ歩み來る。地大將見給ひあの杖召せと有りければ。和田の義盛承り。詞ヤア〳〵老人大將の召さるゝぞ。早々是へと招かれて。地はつとばかりに老人は御前間近く畏る。義經仰出さるゝは。詞山人なれば案内は知つつらん。是より宇治へ出んには。近道有りやと問給へば。ハア心安き事のお尋ねや。御覽遊ばせ西に見えたる平岡をば。あらた山と申しそれより先に。頸落の瀧といふ所を行かんには近道にて候と。言ひもあへぬにいやコリヤ老人。戰場に向はんに頸落の瀧とは禁忌なり。又其外に道はなきか。さん候此御社を弓手へ廻り。笠置にかゝつて御通り地有れよき道の候と。申上ぐれば義經重ねて。此御社の御神體は如何なる神ぞ。老人知らずやと宣へば。詞ハア賤しき身なれば委しくは存ぜねども。此御神をいとゞの明神と申して。文字には射手と書き候へども。言ひ安きが慣はせとや。いとゞの明神と申すなりと語れば。地大將御悦喜有りいとゞの明神弓手へ廻り。かさにかゝつて攻めよとは面白し〳〵。それ老人に恩賞せよと仰も重き御惠み。御褒美數多賜りて。早御暇と老人は。宿所をさして フシ歸りける。地梶原平三進み出で勇ましく。詞武士の運に叶ひ。弓矢神の御前に暫くも休らふ事。偏に神の御加護なれば神前にて。的矢を射軍の勝負を試み申さん。地見物